

「資料体」としての「vanity records」BOX

能勢伊勢雄 (Live House PEPPERLAND)

70年代に台頭した日本のオルタナティブな表現のアーカイブがここにある。内容は、決して一世を風靡した誰でもが知っているミュージシャンなどではなく、この「vanity records」BOXを聞いていただければ日本の音楽がどのような試行錯誤の中からオルタナティブな表現を獲得して来たかを辿ることができる。ここに収録された音源は1978年から始まる、実験精神に彩られた貴重なアーカイブである。

イギリスのVirgin Recordsに影響されて始まったリリースと思われがちだが、音源を聴いていただくと多種多様な表現が認められ直接的な関連が稀薄であることは明らかだ。これは、紛れもなく日本国内で生じたオルタナティブなインディーズの音源であることの証明である。そして、実はこのことが最も重要な点である。

「vanity records」は阿木譲の『Rock Magazine』誌上からの呼びかけで始まった一連の動きであった。この経緯は嘉ノ海幹彦氏が浩瀚に詳述している「Vanity Recordsと『ロック・マガジン』1978-1981」※-1のテキストと共にアーティスト・インタビュー※-2を併せて参照していただきたい。ここでは、この「vanity records」BOXとどのように接して行けば良いのかをこの機会に記してみたい。

「vanity records」BOXに収録された70年代といえば、インターネットが未発達で、今日でも、当時のアーティストを検索しても明確な情報すら得られない状態にある。このインターネット情報の欠落した時代の音源であることは大きな意味を持つ。音楽ジャンルは異なるがポール・ラックマン監督の映画『AMERICAN HARDCORE』（キングレコード）に描かれたように、アメリカのローカル地域ではインターネットの空白地帯において固有な表現が生まれ、多種多様なハードコア音楽が誕生していたことが生々しく伝えられている。

しかし、インターネットが発達するに連れて音楽表現が地域性を喪失していき、インターネットから何かしらの影響を受け、この多様性を失い平板化していった。これが我々を取り巻いている今日の状況だ。70年代は音楽情報が局所的であったが故に、音楽の世界が平板化せず、固有でバナキュラーな表現スタイルが誕生した。

この「vanity records」BOXの音源もそのような状況下で誕生したものだ。今日までほとんど聞かれることが無かった未盗掘の遺跡に眠った音源であり、このような状況が逆に多様な表現を東洋の片隅に生じさせていたことを知って新鮮な驚きを感じる人も多いだろう。



ポール・ラックマン監督
『AMERICAN HARDCORE』

ノスタルジーをめぐる現在の音楽状況

ここで、現在の特徴的な音楽状況を簡単に解説しておきたい。それはノスタルジーを巡る問題である。ノスタルジーに回帰するのか、ノスタルジーを埋葬して不条理極まりない世界の現実に向き合うかの、その2つの流れ

に要約される。パンデミックの現実をふまえれば、音楽的美意識で作られた音楽や、ただ消費される音楽についてはここでは語る必要がない。ノスタルジーに関しては、Vaporwave と呼ばれるインターネット上で展開された音楽の一群がある。2001 年 9 月 11 日に勃発したアメリカ同時多発テロを引き金に、アメリカのニュース番組をサンプリングした猫 シ Corp.『NEWS AT 11』がインターネット上に発表され、SAINT PEPSI や Vektroid、SACRED TAPESTRY…らの多くの Vaporwave が誕生した。また、猫 シ Corp.が幾度もモチーフとして使った、閉店に追い込まれたショッピング・モールは、幸せだった日常へのノスタルジーの象徴として描かれる。スケートボードマガジン『VICE』のサイトで伝説のスケートボーダー、リック・マクランクが出演した hulu『幽霊モール』という映像が紹介されているように、廃墟と化したショッピング・モールにホームレスが住み着きスケーターがスケートをする映像は、再び戻れない幸福な日々を伝える。最近の LOCUST『The Plaintive』(Suction Records) の音楽からは、産業も衰退し錆びついたラストベルトのイメージを伴いながら、70 年代に通じるメランコリーなメロディと、それに加えられる重奏音にインダストリアルミスティ・ミュージック(工業神秘主義音楽)の末裔を聴く思いがする。重工業世界の残り香である。

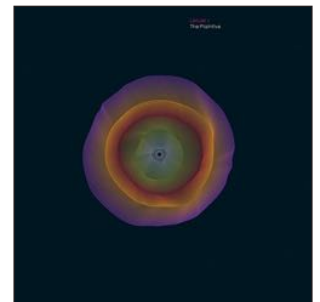
我が国でも 2011 年 3 月 11 日の東北地方太平洋沖地震による地震と津波の影響により、東京電力の福島第一原子力発電所で発生した原子炉爆発・炉心溶融事故の後に、竹内まりやの「Plastic Love」をスクリュー & チョップした Night Tempo の『Pure Baby Maker [Rewind]』(Neoncity Records,Cassette) や『Wink ザ・昭和グルーブ』(Polystar Co.,Ltd.)という Vaporwave ムーブメントが始まった。日米共に過ぎ去った平穏な日々を懐かしむかのような、消費された楽曲を素材にしてノスタルジーを喚起するものだ。※-3

それに追い打ちをかけるように、現在ではオブスクエア・シティーポップと呼ばれる音楽のムーブメントすら台頭している。ヒットしなかったスカムな流行歌の掘り起こしをレア音源として珍重し、DJ プレイしているものだ。本物のスカム・ミュージックの可能性は、オルタナティブな音楽が取りこぼした分野の可能性に向けて新たなオルタナティブを再発見することであるが、オブスクエア・シティーポップではこの域に達するものは見受けられない。本物のスカムが求められている!!! このようなスカムを追求しない限り 70 年代のオルタナティブの表現と拮抗し、リンクすることは不可能だ。ここに真正スカムとオブスクエア・シティーポップのスカムとが峻別される。「vanity records」BOX に収録された音楽の新たな表現が多様な形で出てきた我が国のオルタナティブな時代の成果とはまったくの別物であり、オブスクエア・シティーポップは一種の Vaporwave の悪あがきであるかのように見受けられる。

このように、海外では 9.11(アメリカ同時多発テロ)、我が国では 3.11(原発事故)以降、テロの社会不安と放射能汚染のダメージのなかで、音楽がノスタルジーへ回帰する。ノスタルジーが心理的な治療効果をもたらして



猫 シ Corp.『NEWS AT 11』
Vaporwave



LOCUST『The Plaintive』



Night Tempo『Pure Baby Maker [Rewind]』Cassette



Night Tempo『Wink ザ・昭和グルーブ』

いたのでは無いかと思える時期もあったが、加えてコロナ・パンデミックのディストピアが現実のものとなった今日では、それも感じられない。The Caretaker の音楽は、すでに平穏な日常をノスタルジックに回想する程度では済まされないことを伝えていたが、Vaporwave は現実の直視から離れ音楽が生み出す"偽史"のなかに我々のリアリティーを埋め込もうとする欺瞞がある。ここには未来は無い!!!

「不穏な気配」とパンデミックの賛美歌

むしろ、Bliss Signal が予感的に『Bliss Signal SLOW SCAN』(Profound Lore Records) で描いたような「何者かが」この世界に潜み蠢いている「不穏な気配」のほうが正当な現実描写である。アート文脈の音楽の世界でも GEORGE KENTROS + MATTIAS PETERSSON の『THERE ARE NO MORE SEASONS』(Sekt Records) などにその予兆は顕れていた。

これらの音楽的予兆に答えノスタルジーを丁寧に埋没させるために、2019 年までに 6 枚のアルバムをリリースするという「予め終わり」を決めた、レイランド・ギルビーの The Caretaker 名義でのプロジェクトがある。この『Everywhere At The End Of Time: Stage』シリーズは Vaporwave の不毛性をあざ笑うかのようにノスタルジーを埋葬していく。

この The Caretaker のレコードジャケットにあしらわれたイバン・シールの描くアートのビジョンは現代のダミアン・ハーストやジェイク・チャップマン、ダレン・アーモンド…らを世に送り出したイギリスのサーチ・コレクション※-4 以降の表現を書き換える最も現代的なディストピア感を告知するものだ。迫り来るパンデミック直前の 2019 年末に、ポーランドのクラクフ (Kraków) で彼の展覧会が開催された。

電灯も無く壁紙も剥げ落ちた廃墟の会場で、夕日が差し込む時間から日没までの時間帯で行われ、日没と同時に展覧会場から徒歩で The Caretaker のライブ会場に移動するという、展覧会とライブが連動したプログラムの展覧会であった。The Caretaker とイバン・シールの重要さを伝えと、かねてより親交のあるアート・音楽イベントプロデューサーの中野勇介氏が即座にヨーロッパに飛んでくれ、イバン・シールの展覧会とライブの様子をポーランドから映像と共に届けてくれた。中野氏が送付してくれた映像にはステージの背景にイバン・シールの絵画や展示光景がプロジェクション投影されながらライブが進行する様子が写し取られていた。全体のイメージはヨーロッパにコロナ・パンデミックが始まる直前の"世界の没落"を予感させるイベントだった。

この背景にはニック・ランドの加速主義や、48 歳の若さで自死したイギリスの批評家マーク・フィッシャーが引用した哲学者・スラヴォイ・ジジエクの言葉「資本主義の終わりより、世界の終わりを想像するほうがたやすい。」に象徴されるディストピア観がドミナントメッセージとして鮮明に脈づいている。(マーク・フィッシャーの死に捧げた The Caretaker の『Everywhere At The End Of Time: Stage 4』(H.A.F.W.) も参照して欲しい。)



Bliss Signal 『Bliss Signal SLOW SCAN』



GEORGE KENTROS + MATTIAS PETERSSON 『THERE ARE NO MORE SEASONS』



The Caretaker 『Everywhere At The End Of Time: Stage 4』



Botany 『End The Summer-time F(or)ever』

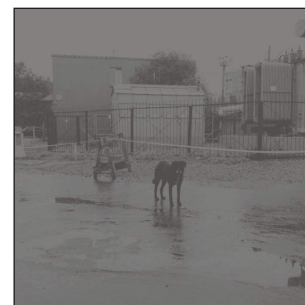


The Stranger 『Watching Dead Empires in Decay』

そしてまた、ダニエル・ロバティンのプロジェクト Oneohtrix Point Never (以下 OPN) は The Caretaker と同様の流れにある。OPN の『Garden of Delete』(Warp Records) は"ノスタルジーの埋没"姿勢を明確に音楽で表現し、アルバム『Age Of』(Warp Records) ではこの傾向は特に顕著に認められる。また、別のアプローチとして Botany『End The Summertime F(or)ever』(Western Vinyl)のサウンドのように Vaporwave 感を保ちながらノスタルジーを脱感作用の方向に向かわせる音楽も生まれている。こちらのほうが Vaporwave より、まだしも良心的だ。さらに今日のコロナ・パンデミック禍で聴けば、The Stranger の『Watching Dead Empires in Decay』(Modern Love) で提示されたディストピア感覚と共に、Goldmund『Occasus』(Western Vinyl) の重層的ドローン上でピアノの単音が反復されるアルバムのなかで認められる感覚は、ゲーテ・インスティテュートの協力を得て制作された Nivhek の『After Its Own Death』(W.25th) を聴くことによって、さらに強調される。通夜のように死者の霊を導く小鑿(鐘)の音を想起させ、単音が緩やかに反復され、死後に生前の生活を営んだ場所に回帰するイメージを伴ってパンデミックの賛美歌を奏でている。人の"死"に関して音楽は一般的に慰霊や追悼のために用いられるが、そのような情緒を超えた招霊の秘儀に沿ったユーティリティ音楽こそが、今日求められているリアルな音楽だ。Nivhek の音楽には多少なりとも鎮魂帰神という讃美歌の本義を具持している。



Goldmund『Occasus』

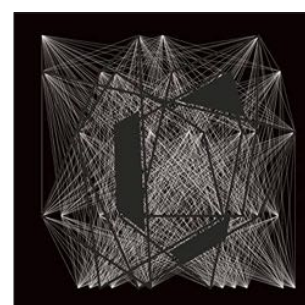


Nivhek『After Its Own Death』

90 年代サイベリアの継承

新たなポストコロナ時代を見据え、我々が立ち向かう未来をうながすために、汚染されたエーテル体環境を緻密な音で描いた Cam Deas の『Mechanosphere』(The Death Of Rave) のサウンドには、工業神秘主義社会のその後を生きるサイベリア世界のイメージが宿っている。※-3 これはウォーリック大学で教鞭をとったニック・ランドの「セオリー・フィクション」と呼ばれるジャンルに接続する。1990 年代にマーク・フィッシャーやセイディ・プラントらは共に「サイバネティック文化研究ユニット (CCRU)」グループを設立した。

この活動からクラブミュージックやセカンド・サマー・オブ・ラブに強い影響力を与えたダブステップの潮流が作り出され、Hyperdub レーベルが生まれた。このレーベルはニック・ランドが育てたアーティストのステファン・サミュエル・ゴードンの影響が強く、彼は、英国の詩人であり MC としてこのレーベルに強い影響力を与えた。Kode9 & The Spaceape『Memories of The Future』(Hyperdub) に遺されたダブステップの背景を知ることのできるサウンドは必聴である。そしてレーベルメイトでありダブステップの看板アーティスト、Kode9 との頻繁なコラボレーションでも知られている。さらに Hyperdub レーベルからは、感覚を捻じ曲げるようなサウンドと共に POP なハニーボイスを漂わせる Jessy Lanza の『All The Time』(Hyperdub) は Vaporwave への痛烈な一撃となっている。ダブステップを生み出した「サイバネティック文化研究ユニット」は



Cam Deas『Mechanosphere』



Kode9 & The Spaceape
『Memories of The Future』



Jessy Lanza『All The Time』

1990年代のトランスミュージック、クラブカルチャーの背後でハイブリッドに進行したニューブリード現象とつながる。当時をまとめたダグラス・ラシュコフ著の『サイベリア-デジタル・アンダーグラウンドの現在形』（アスキー刊）の系譜にあり、スペキュラティブ・リアリズムの一形態として捉えられるセオリー・フィクションの先駆を成した。

スペキュラティブ・リアリズムとは「構築的シュールリアリズム」とも呼ばれ、形式と内容は融解し、すべてが連関し、シームレスな連続体となりスーパーフラットな世界に向かうという、今日の世界でも進行している現象だ。あらゆるジャンルの境界は、サイバネティックスの等価変換論の世界に消え失せ、ウィルスのアナロジーでとらえられる資本主義社会は、貨幣価値を中心に拡散される非細胞性生物であり、あらゆる物質とプラクシス（実践・行動）が等価変換される世界だ。等価変換の先に生態系をも巻き込んだサイボーグ※-5の世界が待ち受けている。これはオブジェクトがオブジェクトそれ自体として形を成すことはない世界だ。

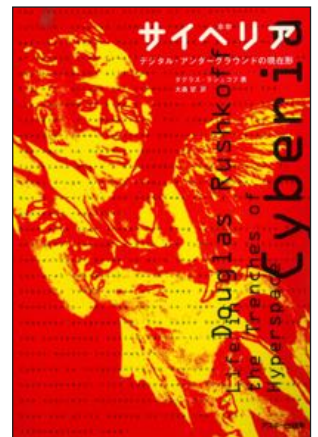
ここではあらゆる表象が多重性の中へ投入され、対象そのものが排除されるフィクショナルな世界に変化し、スティーブン・サスコ監督が描いた『アンフレンデッド:ダークウェブ』（TCエンタテインメント）やスラヴォイ・ジジェクが書いた『パララックス・ビュー』（作品社刊）の様相が進行する。このような状況下で、Vaporwaveの懐かしの消費されたポップスの引用は空疎な世界観でしか無く、むしろ、耳垢の付いていない、70年代に多様な表現を手中にしたオルタナティブな音楽の原点に向かい、余地の残された外部を求め再点検することに意義がある。

ノスタルジーを用いたテレパシー状態の創発

クラブミュージックの進化はトランスミュージックを産み出し、禅の精神世界から行者の世界に向かった Zippy（テクノヒッピー）達がゴアトランス・ミュージックを完成させた。ゴアトランスを支えたサイベリアン達は、一夜のうちに生まれ直す神秘体験を薬物摂取と共に求めた。サイベリアの認識とは進化するデジタル技術とテクノミュージックが神秘体験に限りなく漸近し一体になることであった。※-6

この体験が70年代初頭に生じたプログレッシブ・ロックなどを現在にクラウトロックとして復興させた。Amon Düül や Tangerine Dream に代表されるようなドイツのクラウトロックが何故か当時、英国の Virgin Records からリリースされていた。このクラウトロックの誕生は第二次大戦直後にカール・A・ハルトマンによってミュンヘンで開催された音楽復興運動「MUSICA VIVA」※-7と深く関わっていた。このことは今日あまり語られていないのは残念過ぎる。

OPN の『Magic Oneohtrix Point Never』（WARP）は、英国の懐かしのソフトロックやグラムロック…の多種多様なサウンドを引用して、Vaporwave のノスタルジーとは異なるテレパシー状態を創発する。単なる過去へのノスタルジーではなく、現在を起点に、これまでの音楽体験を未来に向けて反転させ、どのようなビジョンが描けるのか?? この未来のビ



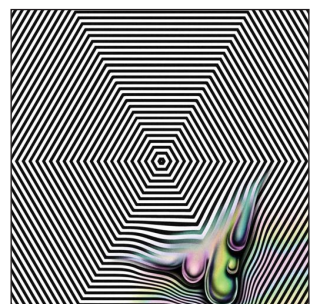
ダグラス・ラシュコフ著『サイベリア-デジタル・アンダーグラウンドの現在形』



スティーブン・サスコ監督『アンフレンデッド:ダークウェブ』



スラヴォイ・ジジェク著『パララックス・ビュー』



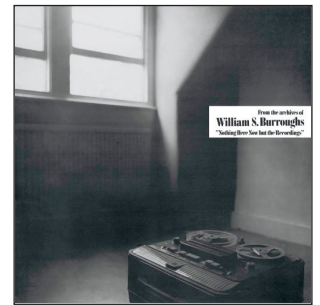
Magic Oneohtrix Point Never
『Magic Oneohtrix Point Never』

ジョン形成に働きかけるのがテレパシーであることを OPN『Magic Oneohtrix Point Never』は体験させる。

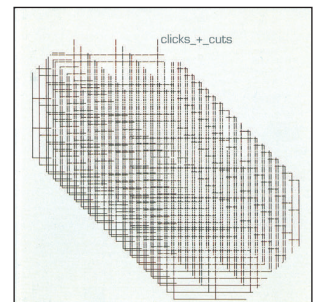
この流れを遡れば MARCEL DUCHAMP『MUSICAL ERRATUM+IN CONVERSATION』(LTM) の「Musical Erratum」(音楽的誤植)に始まる。テキストの積極的反読(誤読)から現代のポスト・モダン思想に影響を与えたイェール学派の先駆的概念※-8へとつながるミスプリジョン(確信誤判)による音楽、そして William S. Burroughs『Nothing Here Now But The Recordings』(Industrial Records)のカットアップをスポークンワーズ上で行った世界と姻戚関係にある。そして、クリックス・アンド・カットの V.A.『CLICKS+_CUTS』(MILLE PLATEAUX) ※-9や、FUNKSTORUNG『Appetite For Distruction』(!K7)。HipHop を人カテクノで過激化したターンテーブルリストの DJ SPOOKY vs.SPECTRE『STEREO SPECIFIC POLYMERIZATION SIMON SAYS THRESHOLD』(BLACK HOODS)。また、コンピューターのバグやクラッシュから生まれたグリッジ・ミュージック…などにまでこの衝動と手法は受け継がれている。そして、この挑戦は音楽の構造と要素をバラバラに解体して再構築するアブストラクトな手法につながっていく。これらのアブストラクトな音楽の進化と受容体験が現在の OPN のベースを作ったとも言える。最近では ACTRESS の『Splazsh』(Honest Jon's Records)などに認められるテレパシー感覚につながる危ない音楽体験である。そこではサウンドを通じてテレパシーの訓練を我々に仕掛けてくる。OPN『Magic Oneohtrix Point Never』のもともとの発想は混信したラジオ放送を意識化して制作されたものだが、エジソンによって発明されたラジオはエジソンが神智学のマダム・ブラバッキーとの霊界通信を行うためのテレパシー受信装置であったことを思い出せば充分だろう。



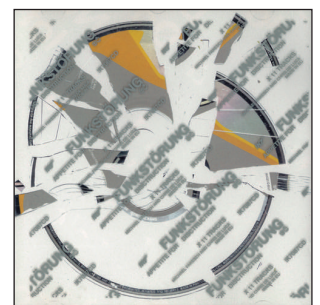
MARCEL DUCHAMP『MUSICAL ERRATUM+IN CONVERSATION』



William S. Burroughs
『Nothing Here Now But The Recordings』



V.A.『CLICKS+_CUTS』



FUNKSTORUNG『Appetite For Distruction』



DJ SPOOKY vs.SPECTRE
『STEREO SPECIFIC POLYMERIZATION SIMON SAYS THRESHOLD』

ドミナントをもたらす音楽。

テレパシーとは、精神分析の資料体内部の体内異物に、ジークムント・フロイトが不本意にも与えてしまった名前である。フロイトが精神分析学の基本原理である「転移」「逆転移」を通じて「資料体内部」(患者)の修正(治療)行為が成立することを発見したことにより、精神分析学を確立したことはよく知られており、「精神感応原理」で語られている。もともと、「精神」と呼ばれるモノは実体科学の対象になるものではなく、いわば古来の概念であり、フロイトはブラバッキーの神智学協会が刊行していた『スフィンクス(の友)』を愛読していたことから、この影響が背後にあったことは容易に想像できる。

実体が無く、しかも患者を眼前にして、他者＝遠隔者に対する治療行為の根幹とした「精神感応」状態をフロイトがテレパシーと呼んだことに始まる。換言すれば精神分析学はテレパシー行為であり、音楽は「ソラリスの海」のように精神感応だけで無く、あらゆる形態形成にも関与するエーテル物質であり、時空を超えた遠隔反応をリアルにもたらし「思考の霊化」を行うテレパシー受信装置として機能する。

この「vanity records」BOX はインターネット空白時代の記録として、隔絶された音源ゆえにスラヴォイ・ジジエクが論述した『否定的なもののもとへの滞留』(筑摩書房刊)の性質を持つ。このことにより世界の深部から、境域からテレパシーを創発する音源として現代に機能する。そして、ポストモダンな多様性の世界に通用する「否定的」な時代と活動の記録と存在にリンクする。「ありふれていない」こと、このことがいかに重要であるのか?? 多様化のなかで消費されなかったことで、つまり、「否定的なもの」とされた埒外からテレパシーがやってくるときにのみ本来の意味で機能し、現代にテレパシーを伝えることが可能になる。このことは、新生気論の学者ヨハネス・ラインケ※-10が語った「ドミナンテ」の働きを誘発する。「ドミナンテ」とは、通常の知識ではなく、人間の生活時間の中で時空を超えて働く「叡智的作用」を指す。テレパシーの別称である。人間の歴史はテレパシーを通してのみ、なんとか生き長らえてきた。進化を超えて、人間の脳が感知する超自然的なメディア・パラクレート(気づき)に到達するための音楽の活用であり、音楽「概念の拡張」をユーティリティとした知的遊戯のジョン・ケージとは根本的に異なる。音楽が PSYCHIC TV/PTV3『HELL IS INVISIBLE... HEAVEN IS HER/E』(SWEET NOTHING/CARGO)以降、アートと混淆した Future ancientism (未来太古主義) ※-11を志向している一面がある現代でも、「vanity records」BOX に収録されたアーカイブは、これから読み解かれなければならない「音楽」そのものから飛来するテレパシー創発の第一級のユーティリティであることだ。

音楽体験構造と「資料体」

ここで、極限のノイズであるハーシュノイズウォールと SEQUENTIA を参考にして、音楽体験の仕組みについて書いておこう。

魚類を空輸する時に用いる麻酔剤がマンチェスターを中心に蔓延した時期がある。この「スパイス」と呼ばれた薬物摂取によってゾンビ状態と化した意識下で、ほとんど変化しない壁のような大音量ノイズが演奏されるハーシュノイズウォールの名盤、THE RITA『THE LILAC FAIRY』(Urashima) と、唯一女性で最初に讃美歌や霊歌の作曲が許されたベネディクト派の修道女ヒルデガルトの楽曲を体験すればわかることだ。

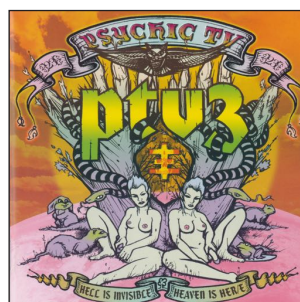
通常音楽を体験として聞く行為には、音楽で表現された世界観に連れ去られる体験をする。これは具体的な楽曲から得られた感情的体験と呼べるもので、アストラル体験としておこう。このアストラル体験は感情を伴った体験として肉体の遠方へと離れようとする脱魂的な性質がある。すると肉体にアンバランスが生じる。肉体に生じたアンバランスを穴埋めするように、神霊的なモノがこの欠落部分に降りてくる。この降霊体験が「音楽体験」と呼べるものだ。(これは「人間の全体性」を常に問題にしたヨハン・W・V・ゲーテの観点から見ると理にかなったことである。) もちろん、降霊するものは聖なるものから悪魔的なものまで多種多様である。この、音楽体験(=降霊体験)は、肉体の外部に連れ出されたアストラル体の強度と反復体験によって我々の記憶に刻印される。記憶形成とはこのような



ACTRESS『Splazsh』



スラヴォイ・ジジエク著
『否定的なもののもとへの滞留』



PSYCHIC TV/PTV3『HELL IS INVISIBLE... HEAVEN IS HER/E』

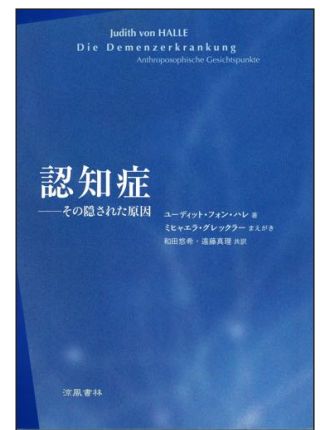


THE RITA『THE LILAC FAIRY』

ものだ。このことは、認知症を近代医学の視点からではなく、霊学の視点から書いたユーディット・フォン・ハレ著『認知症』（涼風書林刊）が物語る。音楽による刺激が人間のアストラル体を肉体から連れ出し、肉体であるエーテル体から出ていくのと同じ分量だけ、霊的なアストラル体が身体の中に入るといふ音楽の構造を知るには、SEQUENTIA の『Hildegard von Bingen Edition』（Deutsche harmonia mundi）がベストである。ヒルデガルトによってもたらされた聖歌を通じて体系的※-12 に今日でも我々は体験することが可能だ。そして、ヒルデガルトの音楽体験による浄化作用のプロセスはカマロカ（情動の棲家）体験に近く、そこでの印象は、生活体験以上に強烈なものであり、より肉体に強く作用しトラウマ的痕跡をもたらす。ハーシュノイズ・ウォールも強烈な音楽のスペクタクル性※-13 に於いて忘我の状況を生み出し、アストラル体験をもたらすことにおいては同質である。この方法しか雑食性の Vaporwave のノスタルジーから抜け出る方法はない。カマロカにおいてアストラル体の浄化が始まり、アストラル体の自我の拡散と変容が始まる。感情を失った情動が走馬灯のように記憶を遡り「思考の霊化」のプロセスに入る。これは特殊なことではない。我々は日常でも音楽を聴きながら「何かを発想」したり「気付く」ことは良くあることで、それは、軽度の「思考の霊化」がもたらされたからである。これらの音楽体験は本質的にテレパシー体験であると言える。テレパシーをサイキックしてくるものは、日常よく聞かれる消費された音楽では不可能だ。雑食性の Vaporwave に取り込まれ消費されノスタルジー化した音楽では機能しないことは自明の理である。カッティング・エッジに残された未発掘な音楽によるしか無い。ここにこの「vanity records」BOX の真価がある。テレパシーは音楽と同様に非実体でサイキックなものである。しかも遠方の“否定された境域”から与えられるほど強く機能することは、ホメオパシー療法のレメディーによく似ている。レメディーが効力を発揮するのは、物性を極度に希釈し物性を失わせた物質霊性（ポテンシー）が薬効として生体に強く働くように、本質的に物性を持たない音楽が与えるテレパシーの効能は良質のレメディーを形成する。特に、超インディで無名なカセットテープ・ミュージシャンを全国から募集した『VANITY Music, Tapes & Demos』に遺る微かなアストラル衝動は何者にもかえがたいフロイトの言った「資料体」であることに注目する必要がある。

(2021.1.15)

最後に、執筆の機会を与えてくださった Studio Warp 社主・中村泰之氏に感謝いたします。中村氏は徹底したアーカイブ音源をフィジカル・フォーマットでリリースし、新譜化を続けている重要な人物だ。このような作業が可能なのは、中村氏が常に最新の音楽に注意をこらし続けておられるからにほかならない。これは、阿木譲が常々言っていた「次の時代を予感する音楽を探し続ける。」ことの表れであり、Studio Warp やアーカイブ作品をノスタルジー化させない理由である。この持続があつてこそ、過去の音源の意味と価値が「新譜」として創出される。

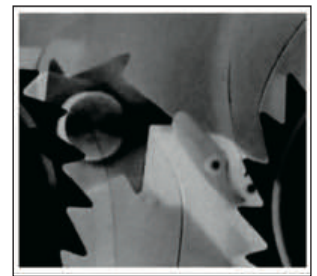


ユーディット・フォン・ハレ著
『認知症』

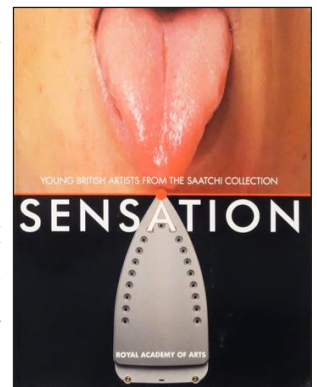


SEQUENTIA 『Hildegard von Bingen Edition』

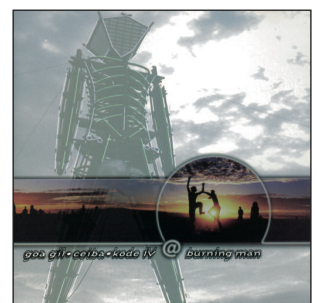
- ※-1 <http://studiowarp.jp/kyourecords/vanity-records> と『ロック・マガジン』1978-1981/
<http://studiowarp.jp/kyourecords/1104-2/>
<http://studiowarp.jp/kyourecords/1104-3/>
- ※-2 <http://studiowarp.jp/kyourecords/category/release/>
- ※-3 本文の「ノスタルジーをめぐる現在の音楽状況」と「90年代サイベリアの継承」については、KENTARO HAYASHI『PECULIAR』(SlowDown Records)のライナーノーツと重複部分もあるが、可能ならば参照していただきたい。
- ※-4 Norman Rosenthal+Richard Stone 共著『Sensation:Young British Artists from the Saatchi Collection』Thames and Hudson 刊参照
- ※-5 拙書・能勢伊勢雄著『ON CYBORG』U.M.U.創造論理研究会刊。電卓も発売されていない1970年に書かれた冊子。内容はノーバート・ウィーナーによって提唱されたサイバネティックスの中心概念である等価変換を個体において極限にまで変換した後に、私とはどのような姿を持つのか??を問題にした。サイバネティックス実存主義の奇書。
- ※-6 既成社会からスピアウトしたビートニクス→対抗文化→ヒッピーの流れの一部はZippy(テクノヒッピー)となり、イビサを経てインドのゴア海岸にたどり着く。そこで、東洋思想とテクノ・ミュージックが新たな融合を遂げた。それがゴアトランス・テクノである。サイケデリックスを摂取した状態でテクノを磨き上げていった。この生体実験を通じて、音楽を用いたアセンションを生んだ。インドの行者に近いゴア・ギルの音にはトランス・ミュージックの元型が総て黎明期に生み出されている V.A.『GOA GIL,CEIBE,KODE-BURNINGMAN』(CEIBA RECORDS)。現在ではゴアトランス・ミュージックを特徴付けたトランス(脱魂)状態に導く音のみで作られたEvol『GRM Trax』(Alku-GRM-TRAX・CD4枚組)がリリースされている。トランスミュージックに付きものの4打ちビートは皆無で、70年代初頭の単音シンセで作られたエンベロープの「グニュグニュ音」のみが延々と続く極端な作品である。これもゴアトランス・テクノの末裔と言えるのかもしれない。
- ※-7 阿木譲編集『ROCK MAGAZINE』(2003号 1980/01)MUSICA VIVA 特集号。ナチ政権下で退廃音楽として弾圧された音楽家達が解放後、カール・A・ハルトマンを中心に再開した音楽祭。この音楽祭がクラシック音楽から現代のROCK MUSICまでを繋いでいった。現代の音楽を知る上で、誰も語らなかった音楽史の最も重要な空白を埋める刊行物。嘉ノ海幹彦氏の問題意識が結実している。
- ※-8 ポスト・モダンの思想形成に影響を与えたイエール学派のハロルド・ブルームは、世界で最もよく読まれている『聖書』すらも人間は全てを誰も読んでいないという。理解しやすく都合の良い部分だけの部分的引用のポスト・モダンのコラージュ解釈でしかないと述べ、すべての読書体験や音楽体験も積極的誤読体験であるとした。
- ※-9 V.A.『CLICKS+_CUTS』にはFRANK BRETSCHNEIDER,SND, PANSONIC,ALVA NOTO,KIT CLAYTON,KID 606 etc.が参加。Vol.1,2 がリリースされた。
- ※-10 日本語出版物が皆無のヨハネス・ラインケ(Johannes Reinke)については日本人哲学協会の飯塚立人氏からご教授をいただきました。
- ※-11 インダストリアル・ミュージックの創始者のひとりであるジェネシス・P・オリッジはスロッピング・グリッスル、サイキックTV、アレイスター・クロウリーの黒魔術とオースティン・スペアの性魔術にもとづく自己変革を目指した新興宗教教団Thee Temple ov Psychick Youthなどの活動をjを経て、妻の死からPandrogeny Project(性転換)を開始したことはよく知られている。これらの軌跡は「近代」を超克するためのFuture ancientism(未来太古主義)といえる。アニメ/アニムスの統合に向かい人間が宇宙的合一を図るジェネシスの姿を語るべき言葉は我々に残されているのだろうか?? 彼らはIndustrial Recordsを設立し工業神秘主義音楽を持って「近代」を問題にしたのだ。ジョン・ケージやピエール・ブレーズに至るまで現代音楽は近代の知的遊戯であり、評論という言葉化は可能であるが、晩年のジェネシスを語るには近代教育を受けた我々の通常「言語」では不可能であることを思い知るべきである。(語るには別の観念と概念を伴った神秘学の言語が必要となる。)ウィーン学派の論理哲学者ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタ



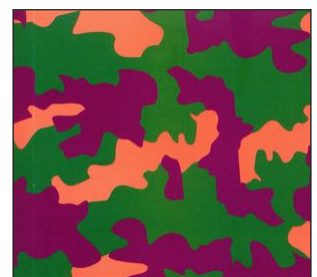
KENTARO HAYASHI
『PECULIAR』



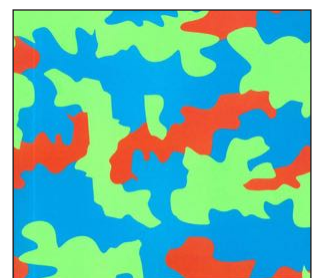
Norman Rosenthal+Richard Stone
『Sensation:Young British Artists from the Saatchi Collection』



V.A.『GOA GIL,CEIBE,KODE-BURNINGMAN』



Evol『GRM Trax』2CD



Evol『GRM Trax』2CD

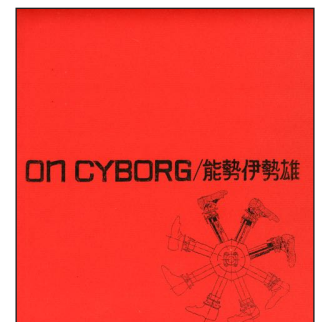
インが論理構築の果に「語りえないことについては、沈黙しなければならない」と書き遺したこと。それが礼節であり倫理というものだ。

※-12 SEQUENTIA『Hildegard von Bingen Edition』では、SYMPHONIAR から始まって、CANTICLES OF ECSTASY→VOICE OF THE BLOOD→O JERUSALEM→SAINTS→ORDO VIRTUTUM→CELESTIAL HIERARCHY へと「シンフォニー的調和」から「エルサレム」を経て「天体の階層」に至る体系が遺されている。

※-13 スペクタクルはシチュアシオニスト (S/I、A/S) の古典バイブルになったギー・ドゥボールの『スペクタクルの社会』(平凡社刊)で指摘された“劇場化した社会”に対抗する意識のあり方である。これは音楽も含め、人々の生も死も、社会関係もメディアが描く「見世物的な」イメージの中でしか存在を許さなくなった。「スペクタクル」と化した現代社会においての闘いは、生産ではなく消費、労働ではなく余暇をめぐるものとなり、そのフィールドは日常生活の娯楽の場となった。イギリスのクリミナル・ジャスティス法案後の非合法レイブ・パーティは「一時的自律領域(T.A.Z.)」(ハキム・ベイ著『T.A.Z.』(インパクト出版会刊) 参照) の戦略をとり「否定的なものへの滞留」を行った。この「否定的なものへの滞留」から社会のメインマーケットを形成する音楽に一撃を加えることはパラマーケット・スペクタクルを形成するしか無く、オルタナティブ・ミュージックはそのような意識を包含している。音楽チャートを目まぐるしく書き換えるオルタナティブな音楽の力を考えてみると解りやすい。この音楽を書き換えるパラ・マーケットで生起しているオルタナティブな音楽の潜勢力こそが問題だ。そのためにはノスタルジーの埋葬は急務となる。また、我々を巻き込み劇場化するハイパーメディア社会でVRを用いた「完全忘我のスペクタクル」を生み出そうとするテクノロジーの姿は古代の秘儀参入の疑似体験にまで至るだろう。しかし、VR ゴーグルの開発者・ジャロン・ラニアーはアバターを介して人間をガゼット化し、強引なスペクタクル状態を引き起こすVRの「忘我」の危険性に気づき、反対論者に転じたことはスペクタクルの問題として肝に命じておきたい。(ジャロン・ラニアー著『人間はガゼットではない』(早川書房刊) 参照)



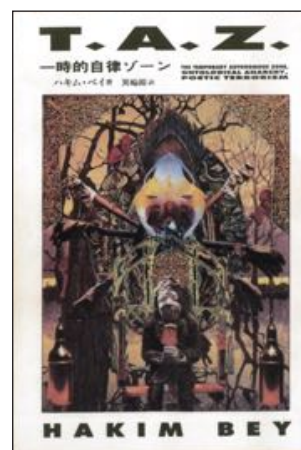
『ROCK MAGAZINE』
MUSICA VIVA 特集



能勢伊勢雄『ON-CYBORG』



ジャロン・ラニアー著
『人間はガゼットではない』



ハキム・ベイ著『T.A.Z.』



ギー・ドゥボール著
『スペクタクルの社会』